



デア ハーフエン Der Hafen

Nr.16
2013年8月・9月

「ドイツとフランス 友好と協力の半世紀」

理事 戸田 龍介



去る7月3日、神奈川大学白楽キャンパスのセレストホールにおいて、表題の講演会が行われた。この講演会は、エリゼ条約50周年記念講演会として、JDGYとも馴染みが深い駐日ドイツ連邦共和国大使であるフォルカー・シュタンツェル氏と、駐日フランス共和国大使であるクリスチャン・マセ氏との協力関係のもと行われた。エリゼ条約は、過去の歴史において鋭く敵対してきた独仏両国が、怨嗟を越えて和解・友情を育む契機となった条約である。独仏両大使は、エリゼ条約を土台とした両国の貴重な体験を、日本の若い世代に伝えようという崇高な目的のもと、自らの言葉で率直に語りかけられたのである。

両大使の講演内容は、現在における独仏両国の良好な関係と、それを可能にしたエリゼ条約を土台とする様々な施策上の紹介が中心であった。独仏の良好な関係については、例えば現在、国際的な会議や交渉において、ドイツ側が真っ先に連絡しようとするのがフランスであり、同様にフランス側も最初の相談相手はドイツであるということであった。そして、これまで第1次、第2次の両世界大戦を中心として、破滅と苦難を経験しながら敵対してきた独仏両国が現状に至る良好な関係を築くまでには、アデナウアー元西独首相やドゴール元仏大統領等の政治家レベルにおける努力や、両国の共通歴史教科書の作成といった学者レベルの工夫も必要だったという。

しかしながら、何と言っても大きかったのは、市民レベルの草の根交流、特に若者達の交流であったという。独仏両国政府は、エリゼ条約締結と同年、独仏青少年事務所を創設し、750万人もの独仏の若者が隣国を肌で知る機会を設けたとのことである。ちなみに、シュタンツェル大使は、このプログラムにより、フランスに滞在し、フランスの若者と交流したそうである。

(P2へ続く)

「個を磨け：

ケイスケが欧州で体得したこと」

横浜日独協会会長 早瀬 勇

サッカーW杯アジア予選、対オーストラリア戦。後半1対1で日本にペナルティー・キックが与えられた。このゴールが決まれば日本の出場が確実になる。固唾をのむ中、本田圭佑(ケイスケ)選手の左足シュートは見事に決まり、その瞬間日本中が歓喜の渦となった。応援団の前で膝を曲げ天を仰いだケイスケの姿が、私の脳裏では2004年星稜高イレヴンを全国選手権大会に送り出したときのケイスケ主将の姿と重なった。

勝利の喜びの記者会見でケイスケは、「“個”を磨かなければ世界で勝てない。チームワークは日本人はもともと得意だが・・・」と言ってのけた。高校1年生でレギュラーとなり、先輩たちに大声で指図していたケイスケを思い出させる活の入れ方だった。「個の充実」、これこそ星稜高で長所を伸ばす教育を受け、オランダやロシアで個人技を競い合う環境になれた体験的結論であり、同僚や後輩への助言であった。

星稜高は松井秀喜選手などの野球で有名だった。サッカーが強くなったのは河崎護という名監督の指導力のお陰であり、当時まだ珍しかった人工芝を導入して全国から強豪チームが大型バスで練習試合に集まったお陰でもあったと思う。

2004年の全国大会への壮行会は、幼稚園から大学までの選手、家族、OBなど500人を超える星稜サッカーのサポーターがホテルの大広間を埋める大盛況だった。乾杯の挨拶を求められて私は、ドイツ・サッカーの帝王と呼ばれたベッケンバウアーの話をした。W杯西独(当時)大会代表選手(DF/MF)として、また西独代表監督として活躍し、ディフェンスの域を超えた攻撃的プレーを考案した男である。壇上の選手たちが一瞬集中して聴いてくれたように感じたのは錯覚だったかもしれない。しかし、既に水準を超えていたケイスケに、西ドイツに頭を使った偉大なサッカー選手がいたことを伝えたかったのである。

今度はモスクワからミラノへの移籍が伝えられている。ケイスケなら世界のどこでもリーダーシップを発揮できる。そしてこれからも、世界での体験を我々に伝えて欲しい。(了)

(註：早瀬会長は2001年～2008年、金沢星稜大学教授・学長を勤められました。)



法人会員

株式会社文芸社・ウィングレル株式会社・ボッシュ株式会社・フェリス女学院大学・株式会社テレビ神奈川
モトスミ・プレーメン通り商店街振興組合・公益財団法人登戸学寮・株式会社 コトブキ

(P1から続く)

若かりし大使はそこで、「あんなに敵対してきたフランスではあるけれど、フランスの若者は自分を含めたドイツの若者と何ら変わるところはないのだ」と実感されたそうである。そうなのだ。戦争を筆頭とする人々の争いごとは、実は、相手をよく知らないという単純なことに起因している。さらに、相手をよく知らないからこそ生まれる偏見は、やっかいなことに、一度ある世代の人々に染みつくると容易には拭い去れない。独仏両国政府の慧眼は、偏見がまだ染みつく前の若い世代に、とにかく相手国を知る機会を積極的に設け、将来の真の友好のための種を播いたことにある。現在、この種は見事に花開き、政府間レベルのみならず市民間レベルにおいても、かつての「宿敵」であった相手国を、「無くてはならない友好国」とお互いが認めあっているのである。



両国大使の講演の後も、大使と学生による質疑応答が活発に行われた。学生の質問は、昨今話題になっている懸案の日中関係に集中した。これは、講演会に先立ち、石積勝神奈川大学学長より学生に対して行われた、日中関係を考える上でも心して聴くようにという訓示に触発されたのかもしれない。熱い質疑応答の後、その興奮も冷めやらぬまま、別室で両大使と学生達とがお茶を飲みながらさらに話す機会が設けられた。公務でお忙しい中、時間の限り学生達との交流をして頂いた両大使には感謝の言葉もないほどである。同様の感謝の念は、当講演会を後援して頂いた JDGY と、お忙しい中参加頂いた JDGY 会員の皆様に対しても捧げさせて顶きたい。

困難で解決不可能にも思える国家間の問題を、一朝一夕に魔法のように解決する手段などこの世に存在しない。独仏関係が今日のような状況に至るまで、エリゼ条約締結後 50 年もかかっているのである。我々がここから学べることは色々あるが、私見も交えて言わせてもらえば、難題解決に向けての必要条件の1つに「時間」があると思われる。そして将来に向けた長い時間を有しているのは、残念ながら現在第一線にいる大人ではなく、若者なのである。むしろ大人は、現状を打破すべく最善の解決法を探らなければならない。ただしその一方で、若者が最良の解決法を探る道を閉ざさず、静かに整備することもまた肝要である。最良の解決のために必要な長い時間は、若者のみが有している特権であり、可能性でもある。独仏大使が多忙の中、日本の若者である神大の学生諸君に熱く語りかけてくれたのは、この故なりと信ずるものである。

「藤の園」へ板絵集寄贈



6 月例会開始前に会員奥村千恵子・宏道様ご夫妻よりご子息俊道氏の板絵集「木調律 The Wooden Canvas」三冊が早瀬会長へお渡しされました。これは横浜日独協会が支援している、一の関の「藤の園」への寄贈を奥村様が望まれ当協会を通じお贈りする式でありました。板絵集は装丁内容共に色彩の美しい大変立派な本で藤の園より次のような内容の礼状が届きました。(大久保)

「お心のこもった素敵なお本のご寄付を頂戴し心より御礼申し上げます。大切にいたします。これからも皆さまの善意に支えられていることを忘れることなく子どもたちに寄り添いながら歩んでいきたいと思えます。末筆ではございますが、皆様の健康を願います。主イエス・キリストの豊かな祝福がありますよう心からお祈り申し上げます。

図書担当保育士 千葉 幸江

木調律 The Wooden Canvas



著者:奥村 俊道 英訳:デイビット・フリーマン 出版社:文芸社

【高校生作文コンテスト推進プロジェクト】

会報でご紹介したドイツからの高校生滞在記は皆様の記憶に新しいことと思います。当会でも同様の企画を温めておりましたが、この度、横浜市・ANAのご協力のもとプロジェクトが一步を踏み出しました。世界の国々はますます相互依存を深め、市民レベルでも国際化が進んでいます。日本の将来を担う若者たちに、世界を、そして外から日本を見る機会を持ち、ドイツとの友好を深めてもらうのが目的です。当会とフランクフルト独日協会の交流事業の1つである当コンテスト応募者の中から、優秀者2名をフランクフルト市への研修旅行に招待すると共に、同市からも高校生を受け入れています。

(磯貝 喜兵衛・佐藤 恵美)

6月例会講演会

「ドイツに学ぶ一教育・政治・尊厳死」 に出席して

会員 大野 眞理子



6月19日、どんよりとした梅雨空のもと、私は久しぶりの例会出席を楽しみに、横浜ワールドポーターズに向かいました。早瀬会長のお話は、まずはワールドカップアジア予選の最終戦でゴールを入れた本田圭佑選手の話から始まりました。会長が星稜大学の学長をされていたとき、「星稜サッカーサポーターズクラブ」というのが作られ、当時星稜高校に在籍していた本田選手をバックアップされたようです。いち早く人工芝を導入したことにより、日本全国の強豪高校から練習試合を申し込まれ、技術の向上を図ることが出来たということです。本田選手と会長の意外な関係を知ることができました。その次に、ゲーテのお話があり、いよいよ本題に入りました。

小学校4年生で進路を決めなくてはいけない**ドイツの教育制度**のこと、午前中で終わってしまう公立小学校。小さいうちはのびのびと遊ばせるが大学での勉強は厳しい、というドイツに対して、小中学校では塾通い、大学に入ったら遊んでいても卒業できる、という日本の教育には私もかねてから疑問を持っており、次世代を担っていくたくましい若者を育てるにはどのような教育が望まれるのか、大きな問題だと思っています。中高一貫教育であるギムナジウムの卒業試験と大学入学試験を兼ねた全国統一試験“アビトゥアー”は年一回の一発勝負ということで、親子共々緊張を強いられるそうです。これに合格すればすぐに大学に入る必要はなく、いったん社会に出て職業経験を積んだあとに入学することもできるという制度はとても魅力的だと思いました。日本では、4月に新卒一括採用ということが慣行になっているが、これは改善すべき、というご意見に私も大賛成です。本当にもっと職業経験が評価される社会が望まれます。

そのあと、**地方分権と連邦参議院の役割**についてのお話がありました。連邦参議院の制度は日本でもぜひ参考にして欲しいです。

そして次のテーマが皆様の一番関心を持たれたことだと思います。「欧州には寝たきり老人は殆どいない」ということで、**尊厳死**についてお話をいただきました。ドイツでは、刑法で安楽死は禁止されていますが、オランダでは“Life-end Clinic”という出前制度があり、スイスでは外人用安楽死協会という団体があるそうです。日本では安楽死は禁止されていますが、今、尊厳死協会に入る人がふえているようです。私の父は10年以上前になりましたが、既にそのとき尊厳死協会に入会しておりました。85歳のお誕生日に、「無益な延命措置は一切お断り

して尊厳死を選びます。」という“遺言書”を書き、53回目の結婚記念日(20世紀最後の結婚記念日)には、家族全員の名前をあげて“感謝の言葉”をのこしました。そして、“私の葬儀・告別式について”と書かれた紙と、辞世の句が3首・・・父の死後、初めて目にするこれらのものに私は涙が止まりませんでした。

人生最期をどう迎えるかは人それぞれですが、私は父のように感謝感謝で人生を閉じることが出来れば幸せだと思います。早瀬会長、とても興味深いお話をありがとうございました。

中小企業支援プロジェクト (その後)

中小企業支援プロジェクト委員長 坂井 啓治

一切歯扼腕だが粘り強く奮闘中—

苦闘の地域中小企業と、ドイツ経済の牽引車ドイツ中小企業(Mittelstand)との経済・技術交流を横浜日独協会(JDGY)が橋渡ししようという構想で「中小企業支援委員会」が立ちあがって丸一年経ちました。

この間、横浜市政策局・経済局にはJDGY会長はじめ幹部とともに構想の趣旨を説明し、ご指導とご協力を仰ぐべく数回の会議をもち、また横浜市中小企業支援センター(IDECS)にも漸く面談の機会を得て、その後e-メールでの交信による相談などを行ってきました。

一方ドイツ側には、昨年JDGYと友好協定が出来たフランクフルト日独協会クノブラオホ事務局長が4月来日された際の打ち合わせも相俟って、5月来日のFRM国際投資促進公社の日韓担当プロジェクトマネージャー J. Siegle氏との面談や交信を重ね、またフランクフルト近郊をカバーするダルムシュタット商工会議所へのアプローチを行うなどJDGY構想の取りあえぬ布石を終えたところですが、いかんせん日独双方の中小企業側で独日市場への具体的な関心や引合い・オファーを引き出すまでには至っておらず切歯扼腕しています。問題は双方で、どんな分野(これまで日本とドイツ側の対象となりそうなIT, 再生エネルギー、バイオ、usw.)においてどんな企業が、どんな形で技術交流・提携・商いが出来るのかを探り出す必要がありますが、まだ具体的な情報は得ておらず暗中模索の只中にあります。

対外的に必要なJDGYの紹介パンフレットも目下作成検討中ですが、会員各位におかれても地域中小企業に知己がおられるようでしたら、JDGYの構想をご紹介頂きこのプロジェクト推進にご協力頂きますようこの紙面を借りてお願い致します。

Zwischen zwei Kulturen

会員 大島 レオナルド

小銭 / Kleingeld

今回はちょっと細かい話になりますが、つい最近知り合いと小銭の話をしてました。ヨーロッパではほとんど小銭を使う必要が無く、私は全て大きい器に集めて年2～3回銀行に振り込んでました。でも日本では逆によく使います。どうしてかなと考えたら、自動販売機の事を思いつきました。ヨーロッパの販売文化はやっぱり日本ほど自動化されていないんだなと考えました。

Letztens habe ich mich mit einem Bekannten über Kleingeld unterhalten. Ich kam zur Erkenntnis, dass ich in Europa kaum Kleingeld verwendet habe – es landete immer in einem Behälter, welches 2 bis 3 mal im Jahr auf die Bank gebracht wurde. In Gegensatz dazu verwende ich in Japan sehr häufig Kleingeld. Nach einer kürzeren Überlegung warum, dachte ich an Automaten – es leuchtete mir ein, dass in Europa bei weitem keine so ausgeprägt automatisierte Vertriebskultur herrscht wie in Japan.

新入会員紹介 (敬称略) 2013.6.1 以降

株式会社 コトブキ

「同社は公共空間の安全と安心を目指す企業です」

個人 浅利 通也 (アサリミチヤ)

<事務局よりのお知らせ>

① 9月15日 設立3周年記念行事の予約受付について: 6月会報で先行予約につきご案内を致しましたが、メール、Fax、ハガキ等で予約され、入場整理券代金を未だ振込んで居られない場合は、下記へお願い致します。入金を確認次第、8月中に入場整理券を送付致します。

(振込先) 横浜銀行横浜駅前支店 (店番号: 383)

普通預金口座; 6052634

口座名義; 横浜日独協会 (ヨコハマニドクキョウカイ)

② 10月例会ーオクトーバーフェスト

6月会報で当オクトーバーフェストの予定日を9月21日(土)とお知らせしましたが、会場の都合で日程は9月23日(月)敬老の日(祝日)と変更となりましたのでご注意ください。また10月例会ですが、開催月は9月ですので併せてご注意を!!

③ 3周年記念行事PRチラシ/

協会紹介パンフレットの作成

上記チラシ及びパンフレットを8月中には印刷を完了し、下記事務局で保管しておりますので、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

(照会先) 事務局 能登 崇 Tel&Fax: 045-546-0801

行事予定

■9月 設立3周年記念例会: (再報)

日時: 2013年9月15日(日)

14:00開演(13:30受付) 17:00終演

会場: 男女共同参画センター(戸塚フォーラム)

ホール(JR/地下鉄「戸塚」駅から徒歩4分)

- ・講演; 駐日ドイツ大使(Dr.Volker Stanzel)
- ・記念演奏会; JDGY 会員島村武男様のバリトン独唱
 - ・デュッセルドルフ・メナー・コアによる合唱
 - ・フラウエンコア アム ラインによる合唱

会費; 一般1000円 学生500円

■10月例会

オクトーバーフェスト

日時; 9月23日(月) 午後4時~7時

場所; 横浜カントリーアンドアスレティッククラブ(YC&AC) Tel: 045-623-8121

根岸線山手駅より徒歩15分

会費; 2500円(食事+フリードリンク1杯)

追加飲物は自己負担となります。

■10月例会 ; 3周年祝賀会

日時; 10月19日(土) 午後3:00~5:30

場所; ワールドポーターズ6階 会議室③

内容; 設立3周年祝賀ワインパーティー(仮称)

会費; 2,000円

協力; 伏見ワイン(代表; 黒川会員)



編集後記

*今回も盛りだくさんの情報をお届けできたと思います。協会の様々なプロジェクトが動き始めているのが実感できますね。(山口 利由子)

*横浜日独協会の創立3周年を迎え感慨深いものがあります。3年前の今頃は発起人の一人として忙しくしておりました。可能性を十分に感じておりましたがこの短い年月でこれほど大きく充実した協会へと発展したことを皆様と喜びたいと思います。会報の第1号は2頁の編集、第3号からは4頁、12号からは山口さんが編集に加わり13号でカラー化が実現しました。会報は会の活動の結果であります。将来への重要な布石でもあります。常に新たな試みが必要です。皆様の一層のご協力をお願い致します。(大久保)

横浜日独協会会報

発行2013.8.1(第16号)

事務局: 〒223-0058 横浜市港北区新吉田東2-2-1-913

能登 崇 方

Tel & Fax: 045-546-0801,

e-Mail: tak_noto@yahoo.co.jp

会報編集責任者 大久保明

e-Mail a-okubo1926@ttmy.ne.jp

横浜日独協会ホームページ

URL:<http://jdgy.sub.jp/index.html>